

お父さんのマクラ

大場 美海

今日も私のとなりにはお父さんがいない。いつも、私のそばにいてくれたお父さんは今はまくらだけになってしまった。

そのまくらには、お父さんのおいがまだ残っているような気がする。だから、私はそのまくらをぎゅっとしてねる。そうやってねると、なんだかお父さんがそばにいるようにとても心が落ち着く。

お父さんが仕事で福島県に行ってしまうまで、ねる前の時間は一日の中で一番楽しい時間だった。家族でトランプをしたりテレビを見て笑って過ごしていると、あつという間にねる時間になる。そして、私はいつもお父さんといっしょに二階へ行く。

「ふう。」と言ってお父さんはまくらにドスツと頭をのせてごろんと横になる。私は、お父さんのまねをして「ふう。」と言いながら、まくらに頭をボンとのせて横になってお父さんを見る。なんかおもしろくて、二人で小さく笑う。

私達はよく、ねながらしりとりをして遊んだ。でも私はほとんどねむくなって、まぶたが下がってきていつの間にかねてしまう。どちらが勝ったのか、最後の言葉は何だったのかはわからない。ただ、たくさん笑ってたくさんしゃべった楽しい時間だったことはおぼえている。

今は、となりのまくらを見てもいっしょに笑っていたお父さんはいないから、とてもさみしい気持ちになる。

となりにお父さんがいて遊んでもらえる事は当たり前だと思っていたから、今までありがとうという気持ちを持つたことがなかった。でもとなりのまくらにお父さんがいないのを見て、当たり前だった楽しい時間をくれてありがとうと言いたくなつた。

毎日私の心を落ち着かせてくれるお父さんのまくらと、福島県でがんばっているお父さん、いつもありがとう。私は、今日もまくらをぎゅっとしてねます。